伊豆海域の漁海況情報の提供と今後の展開を考える

伊豆周辺海域の海況は、一義的には伊豆半島沖合を流去する黒潮の流路の影響を強く受けており、その離接岸による暖水の波及、衰退により短期変動を繰り返しています。伊豆分場では、中央水研から公表される黒潮流路の予測をもとにして、半年程度の漁況の予測、検討をしています。

近年は、水温などの観測技術や体制が進歩し、また、観測データを基に作成される海況図の作成技術も、一都五県の共同研究により改良され、精度の高い関東・東海海況速報として発行されるようになりました。さらに、携帯電話を使用した伝達システムもでき、誰でも精度の高い情報をリアルタイムで得られるようになりました。伊豆半島沿岸の一本釣や定置網漁業関係者は、それぞれ視点は異りますが、水温の絶対値、水塊の動き、流況予測などを海況図から読み取り日々の操業につなげていると思います。

この海況速報は、関係者の要望の取り込み、技術的な改善を図りながら、引き続き発行されますが、次の展開として、各地先の漁業に役立つ情報として提供できるものは何でしょうか？

考えられるものとして、主要な対象魚種の漁況と海況変化の関係を明らかにして短期的な漁況予測へつなげることがあげられます。日々の海況と漁況のすり合わせから漁況変動のメカニズムが明らかになれば、漁況予測へ踏み出せると考えられますが、残念ながら現時点では、信頼性の高い短期予測ができる技術は確立していません。

この課題は定置網漁業に限らず、全ての漁業に求められた課題でもあると考えています。漁船漁業では、操業に要する経費が大きいため効率的な操業が必要ですが、漁況予測は、その判断の材料になると思われます。例えば定置網漁業でマアジ等主要魚種の短期間の漁況予測が可能になれば、市場の荷動きや値動きなどを見ながらの畜養等、適正供給が可能になり、経営の効率化が図られると考えられます。

精度の高い漁海況予測に対する要望は、以前から強く、重要な課題として国、各県の研究機関、関連団体などが共同で研究を進めてきました。前述のとおり、近年、海況については精度の高い情報がリアルタイムに入手できるようになり、日々の操業に利用できるようになりました。今後は漁況予測においても、漁業経営に貢献できるようなよりよい情報が提供できるように、技術開発を進めていく必要があると考えられます。　　（藤田信一）